

日本におけるフリーランス科学 ジャーナリストの実態に迫る

科学ジャーナリズム研究グループ¹

科学ジャーナリズムの現状を実証的に検討するためには、ふだん目に留まりやすい新聞やテレビなどの大きなメディア企業に勤める科学ジャーナリストの活動だけでなく、大小さまざまなメディアに多様なかわり合いをもつフリーランス科学ジャーナリストの活動実態を把握する必要がある。日本のフリーランス科学ジャーナリストの実態に迫るべく、講談社ブルーバックス執筆者の変遷を調べたり、フリーランス科学ジャーナリストへのインタビューやアンケートなどを試みた結果を報告しよう。

1. フリーランス科学ジャーナリストは1000人以上？

日本にはいったい何人の科学ジャーナリストいるのだろうか。そのなかで、フリーランスはどのくらいだろう。アメリカのサイエンス・ライター協会は会員数 2500 人。そのうちフリーランスが 3 分の 1 を占める。

日本の科学技術ジャーナリスト会議（以下、会議と略記）には 2004 年 1 月 13 日現在 125 名の会員がいる（うち賛助会員 13 名）。会議は設立当初より新聞関係者が多く、現在でも全体の 31% が新聞関係者である。所属・肩書き欄をみてフリーランスと思われる会員は全体の 16%（20 人）、うちメディア企業 OB でフリーを

1 この調査研究は、日本科学技術ジャーナリスト会議 10 周年記念出版（『科学ジャーナリズムの世界 — 真実に迫り、明日をひらく』、化学同人（2004））のなかに掲載することを目的に、会議会長で会議出版小委員会委員長の牧野賢治氏からの依頼を受けて、園田恵美氏（当時は神戸大学国際文化学部、現在東京大学大学院学際情報学府在学）との共同研究として始められたものである。後半に示すアンケートのなかで、会議のあり方についてフリーランス科学ジャーナリストに質問してあるのもそのためである。ところが、原稿提出後、牧野氏の要請に基づいて修正をしていたにもかかわらず、会議出版小委員会（牧野委員長ほか 4 名）の掲載反対意見によって掲載することができなくなった。複数の出版小委員会委員に問い合わせたところ、反対の主な理由は、「新聞社の論説委員や編集委員クラスの科学ジャーナリストによる啓蒙的な本に、読者であるべき学生が執筆者として参加しているのは許容できない」といったことであった。今回の改訂版の文責は林衛（科学編集者、NPO 法人サイエンス・コミュニケーション理事、『バイオニクス』誌ニュース・エディター、hayashi@scicom.jp）にあるが、講談社でのブルーバックスの調査、インタビューやアンケートの立案・実行、その分析の過程では、園田氏の貢献がたいへん大きい。また、会議への原稿提出時には牧野氏のアドバイスをふまえた修正がなされている。本論文集への掲載にあたっては、牧野氏に口頭で了解を得てある。そのほか、多数の科学ジャーナリストの共同によって本稿は成立した。もちろん、今回の試みだけでは、強い結論はだせないで、今後も研究を継続したいと考えている。

名乗る人を除けば13人(10%)となり、アメリカのサイエンス・ライター協会と対照的にフリーランスが少ないことがわかる。とはいえ、現在の会議のなかで1割だからといって、日本にフリーランス科学ジャーナリストが少ないとは限らない。実際にフリーランスとして活動すると、あちこちに活躍している同業他「者」の存在に気づかされる。

そこで、科学あるいは科学技術ジャーナリストの人数の全体像を推測することから始めて、フリーランスの人数や実態に迫ることにしてみたい。

科学技術ジャーナリストを日本で(あるいは世界でも)最も多く雇用しているのは日経BP社であろう。同会社概要によれば、専門記者が557人(日経BPグループ全体では619人)在籍し、そのうち345人が技術系記者だという(2004年5月末時点)。「情報処理技術者、一級建築士などの公的資格保有者や、企業の技術職経験者といったエキスパートも多数含み、まさに世界のメディア企業で最大・最強の専門記者集団を形づくっています」とある。「日経ビジネス」や「日経ベンチャー」など「経済系」の記者を含めれば全従業員のおよそ半数の500人以上の編集記者が在籍、「技術系」に限れば345人(そこからITやパソコン系を除いてもおよそ150人)が日経BP社における科学技術ジャーナリストだといえよう。

読売、朝日、毎日などのメガ新聞では、科学セクションだけで20人から50人の科学記者がいる。たとえば読売新聞の東京本社では世界最大規模の約30人の陣容だ。過去にあるいは社会部などの他のセクションで科学分野を担当した現役記者も含めれば、大手新聞社だけでも200人から300人以上、通信社、地方紙、放送局を入れたら企業に勤める記者だけでも500人以上になるのではないか。

日本で年間約7万冊刊行される新刊のうち自然科学分野だけで7%弱、工学や、建築、児童書分野を一部含めれば、科学技術分野の新刊は6000~1万冊に及ぶといえる。仮に、科学技術分野の新刊に関わった編集者1人当たり5冊の新刊を出版したとすると1200人から2000人という数字がでてくる。書籍編集者だけでこの数字だ(科学書専任の編集者ばかりで毎月1冊刊行という極端な見積もりでも最低500人となる)。

また、新聞社よりも出版社のほうが編集者や制作者、校正者にフリーランスを起用していることが多いので、新聞記者に比べても、編集者の上記数字のなかでフリーランスの割合は多いことはまちがいない。

商業雑誌、学術雑誌、インターネット、放送、企業や科学館などの広報誌、な

どを含めると、記者、編集者、写真家、評論家、プロデューサー、デザイナーなどあわせて 2000～3000 人以上の広い意味での科学ジャーナリストがいると推定される。そのうちフリーランスは少なくとも 1000 人はいるのではないだろうか。1997 年に休刊した講談社の『クォーク』誌の場合、社員編集者 4 名に、フリーランス編集者 2 名、フリーランスライター約 20 名がかかわっていたという（それ以外にも、アートディレクター、デザイナー、写真家がいる。参考までに、プロだけでなく、アマチュアや写真関係の技術者を含む自然科学写真協会の正会員数は 332 名で、会議の 2 倍を上回る。また、環境ジャーナリストの会は同会 WEB によれば 80 名）。

ここまで読んでお気づきの方もいらっしゃる通り、対象とした範囲は広い意味での科学ジャーナリストである。実際に科学ジャーナリストという肩書きを使っている人は少ない（会議名簿の「所属・勤務先」で「科学ジャーナリスト」「科学ライター」は 9 名）。何が科学ジャーナリストの要件足りえるのかという議論にも意義があるが、ここでは、厳密に定義するよりも、広い意味での科学ジャーナリストのなかで、どのようなフリーランスの活動があるのか、また、肩書きによる活動やアイデンティティのちがいを明らかにすることをめざした。

2. 日本のフリーランス科学ジャーナリストのはじまり

日本最初の科学ジャーナリストは誰なのだろうか。識字率が高まり、印刷物が盛んに流通するようになった江戸期の科学や自然災害を伝える瓦版の作者や、明治初期の窮理書ブームの時代の書き手がその候補となる。なかでも明治の戯作小説家たちは、福沢諭吉による『訓蒙窮理図解』のような啓蒙書も著わせば、「究理木瓜と云はんとすれど河童野郎の尻房書生」（『開化新作渡々逸』）と、科学（窮理学）をもじり、茶化した著作も残している⁽¹⁾。近代科学の導入を始めた幕末から明治初期、すでに、いまでいう科学ジャーナリストがフリーランスとして活躍していたのだ。

20 世紀前半の科学雑誌上にもフリーランス科学ジャーナリストの活動がみとれる。たとえば、東北帝大を辞した後、著述業に専念、アインシュタインを招きその業績を紹介、『科学』（岩波書店）を創刊し編集主任となった石原純もその 1 人だ。また、財団法人理化学研究所に研究資金を提供した理研産業団の機関誌とも

いえる『科学主義工業』誌では、寮佐吉が、内外の科学の状況を伝えている。たとえば、純国産宇宙線測定器、高圧実験の新世界記録、鑿井採油法の革新、「プラスチック時代」の黎明、米国の戦略原料の錫とその世界産額、沸石を用いてウラン分離速度の増大化、素人用テレビジョン・カメラ、...とタイトルが並ぶ。幕末から現代まで脈々とフリーランス科学ジャーナリストの活躍は続いている。

20世紀後半に、日本の科学ジャーナリストはそれまでと比べいちじるしく増加したと考えられる。しかし、戦後日本社会は、ジャーナリズムに限らず、社員を中心とした企業社会となった。新聞各社では、書評や投稿欄、一部依頼原稿を除き、記事はほとんどがいわゆる「終身雇用」の記者によるものとなったためフリーランスの活躍の場は限られた。出版や放送でも社員が多くを占めたであろうが、新聞界よりもフリーランスが広く活動していたことはまちがいない。とくに、フリーランス科学ライターの活躍状況を調べてみたい。

3. ブルーバックス 40 年の歴史に科学ジャーナリストの活躍をみる

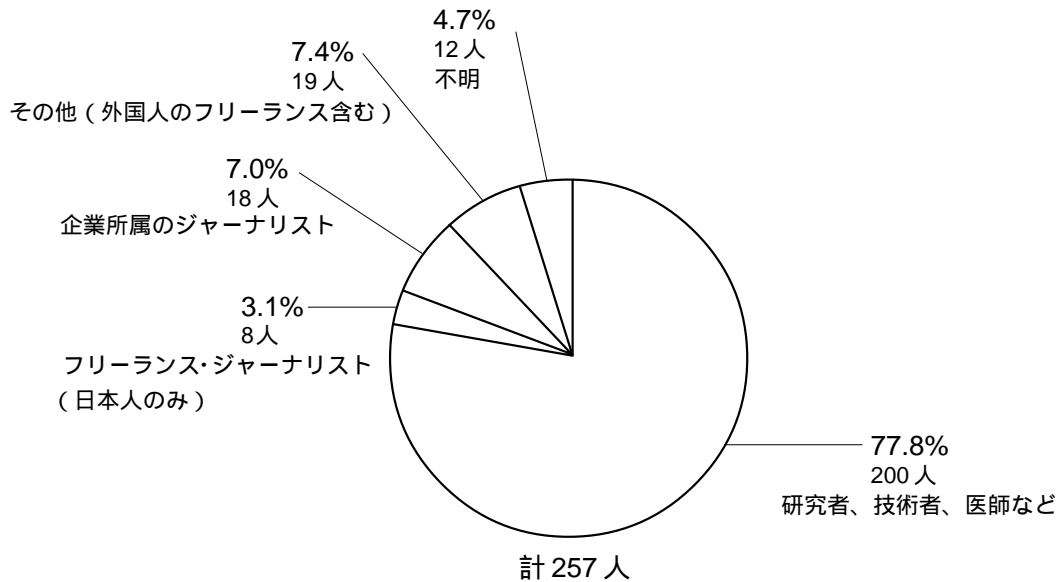
そこで、まず 1963 年 9 月に創刊され 40 年・1300 点を越える歴史を刻み続けている講談社ブルーバックスの執筆陣を調べてみた。グラフはそれぞれ、創刊から 1972 年までの 10 年（正確には 9 年 4 カ月）と最近の 10 年の刊行点数、フリーランス、それ以外の著者分類を示したものだ。

ブルーバックスの第 1 号『人工頭脳時代』（電気試験所電子部品基礎研究室の菊地誠著）ほか 2 冊が刊行された 1963 年 9 月から 1972 年 12 月までに 203 点（延べ著者数 257）、1993 年から 2002 年の間に 449 点（延べ著者数 581）が刊行されている。

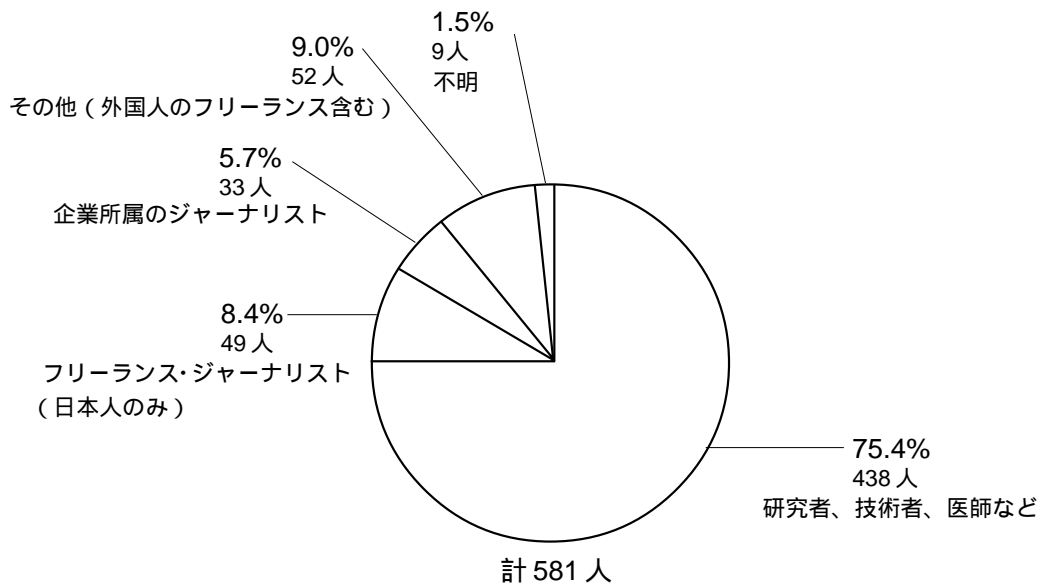
著者についてまずわかるのは、大学や研究所、病院などに所属する研究者、技術者や医師などをあわせた比率は最初の 10 年と最近の 10 年ではほぼ変化していないことだ。いずれも、全著者の 4 分の 3 強が職業科学者によって占められている。残りの 4 分の 1 弱のうち、新聞社の記者などの企業所属のジャーナリスト、フリーランス科学ジャーナリストを合わせた割合は、創刊後の 10 年が 10.1%（26 人）、最近 10 年が 14.1%（82 人）と 4%（56 人）増えている。

フリーランスのライター、ジャーナリストについては、創刊後の 10 年が延べ 8

ブルーバックス最初の10年著者内訳（1963～1972年）



ブルーバックス最近の10年著者内訳（1993～2002年）



図表 1. ブルーバックス著者内訳（延べ人数）。日本の状況を表わすため、外国のフリーランス（創刊後の10年に8冊延べ8人、最近10年は9冊延べ10人）については「その他」に含めた。「その他」には教育関係者なども含まれる。第2号『世界を変える現代物理』（物理学者の伏見康治監修、毎日新聞記者の古田昭作・牧野賢治著）のように共著書も多数あるので、ここで分析する著者の延べ人数は刊行点数よりも多い（事典など執筆者が多数となる特殊なものでは編者を著者として数え、執筆者は著者の延べ人数に入れていない）。

人（258人中3.1%、実数5人）、最近10年が延べ49人（581人中8.4%、実数35人）と割合で2倍以上、人数で6倍以上と増えているものの全体では1割以下に留まっている。2003年2月まで28年間ブルーバックス編集部に在籍した講談社の柳田和哉現学芸部長によれば、「著者の筆力と内容しだい」で書目が決められ、フリーランスを育てようという意識はとくにはなかったという。しかし、ブルーバックスのなかで、フリーランス科学ジャーナリストは少しずつ活動の場を広げている。最近10年間は、1981年から1997年まで刊行されていた科学雑誌『クォーク』で経験を積んだ著者もいる²。

創刊後の10年にとくに特徴的なこととして、国外のフリーランス科学ジャーナリストによって書かれた本を日本の研究者が翻訳するという形が多くみられた（203点中7点、最近10年は449点中5点と減少）。欧米において活躍する多数のフリーランスの科学ジャーナリストが、日本の科学者によって翻訳されるに値するとみなされるほどの著作を出版していることの現われだろうか。

1985年以來の講談社出版文化賞・科学出版賞受賞19点の著者の内訳をみると、フリーランスが3名（吉永良正、竹内久美子、柳澤桂子）で、残り16点は研究者によるもので、ほとんどが自分の専門分野の解説書となっている。

以上みてきたフリーランスの活躍の「上限」はどのように決まっているのだろうか。一つにこれは、ベストセラーが少ない割りに刊行点数が多いという日本の科学書出版事情と表裏一体の結果だと考えられる⁽²⁾。

ライター以外の本業があって、本が売れなくとも生活に困ることがない、研究者、技術者、医師による解説書が多数出版されていることが日本の科学書出版状況の特徴の一つだ。

4. 科学ジャーナリストの「成功モデル」試案

江戸から明治期、20世紀前半、そして20世紀後半にフリーランス科学ジャーナリストの活躍の場が広がってきていることをみてきた。しかし、最近10年のブ

2 ブルーバックス最初のフリーランスジャーナリストは創刊の翌1964年に『動物の結婚』（ブルーバックス15番目）を執筆した松原宏遠（こうえん＝ルビ）である。著者紹介には「日本ではめずらしく古くからの一本立ちの科学評論家」とあり、計2冊のブルーバックスを著わした。探偵小説家でもあり、少年時代天文ファンだった荒正人は、科学者8名との対話集『宇宙探訪』を出版（ブルーバックス18）。共著書『こんなことがわからない』（ブルーバックス26）を出版した相島敏夫は、朝日新聞出身で当時あった科学ジャーナリスト協会代表幹事。「日本の科学ジャーナリズムのパイオニア。（中略）テレビの科学解説には欠かせぬ存在。法政大学出版局長でもある」（著者紹介）。『パテント入門』を執筆した奥村正二は、自由業（弁理士）を営みながら執筆をおこなったという。

ルーバックスのフリーランス執筆者は実数で 35 名であり、1000 人以上という先の予測との開きは大きい。

そこで、今度は、科学ジャーナリストのうち、現在活躍するフリーランスサイエンスライターの「成功モデル」を分類して考えてみよう。フリーランス科学ジャーナリストのなかで多数を占めるライター（作家あるいは物書き）と編集者（および両者の兼業）のうち、著作を通じて活動が表にみえ、かつよく知られているライターの成功ぶりをみることで、日本のフリーランス科学ジャーナリストの特徴を把握するのがねらいだ。フリーランスの活躍の場が限られているなかで、どのような成功モデルがありえるか。

最初は、ライターとして著述業を中心に成功している「中野不二男」タイプ（ライター専業）である。科学以外の分野で成功したあと、平凡社や朝日新聞社の科学雑誌などに登場するようになった立花隆、NHK 記者出身で航空機事故や脳死問題の著作で有名になったノンフィクション作家柳田邦男らの名前が浮かぶ。動物写真家として有名な岩合光昭氏も写真「専業」という点では共通する。バイオホラー小説とともに科学ものも手がける瀬名秀明、生命倫理問題で発言する最相葉月らが、あとで述べるインタビュー・アンケート調査対象者になかでは、武田徹、粥川準二らがこのタイプに分類できる。

ついで、著述業以外にテレビ、ラジオ、講演などでも活躍が目立つ「内橋克人」タイプ（多様なメディアで活躍）。日本の科学技術を支える研究開発の現場を追いかけた「匠の時代」以後、経済評論家として活躍中である。多数の著作があり TBS ラジオの「サイエンス・サイトーク」のパーソナリティである日垣隆、「メタルカラーの時代」のほかテレビ出演の多い山根一真、デジタルカメラの普及によって東京農工大学出身の昆虫写真家に留まらず技術解説の執筆が増えた海野和夫らである。有料メールマガジン、ウェブサイトの利用も増えている。後述の調査対象者のなかでは、日垣隆、森山和道らがインターネット活用のビジネスモデルの先駆者だ。

テレビ時代の初期に日本教育テレビ（現全国朝日放送）、日本科学技術振興財団テレビ事業本部（現テレビ東京）での科学番組の制作を経て、『サイエンス』（現日経サイエンス）の初代編集長となり、三田出版会の設立にも参加した餌取章男は、フリーランスに留まらず会社を設立して、多くの仲間と理想の科学ジャーナリズム構築の事業を追求した。（株）ユニバーサルデザイン総合研究所所長の赤池

学は、科学技術ジャーナリストとして、社会提言をおこなう出版（著述業）とシンクタンクの事業を平行して進める。このような事業家タイプは、NPOによる新しい事業形態が盛んになっている今日ますます増えていくだろう。原子力資料情報室の代表として多数の著作と市民科学のための「高木基金」を遺した高木仁三郎もこの「成功モデル」に加えたい。仮にこれらを一括し「餌取章男タイプ」としておこう。

フリーランスではないが、著作も多くいつでも独立できるにちがいない「中村桂子」タイプ（アカデミズムタイプ）は、肩書きは「学者」だが、学术论文の執筆よりも、もっぱら一般向けの著作や講演で知られる。養老孟司、佐倉統も有名だ³。

さらに新聞社や専門紙誌の企業内ジャーナリスト（タイプ5）を加えれば、科学ジャーナリストのなかのライターを広くカバーできることになる（もちろん、以上の分類群の中間的な科学ジャーナリストもいる）。

このような状況から、科学本業のライター稼業には厳しいものがあるが、人口1億を越える日本語「市場」のなかで、科学以外の分野や多様なメディアを活用したり、起業や事業という方法、アカデミズムという場の利用によって、その才能を発揮させる道がいろいろあることもみえてくる。

5. 現役フリーランスに聞け

では、上で紹介しきれない圧倒的多数のフリーランス科学ジャーナリストたちは、どのように仕事を得て、どんな成果をだし、生活をしているか。その実態に迫るためのもうひとつの方法として、39名のフリーランスからアンケートまたはインタビューによる回答を得た（表）。

質問内容は、主な仕事、肩書きやそれへのこだわり、フリーランスになったきっかけ、これまでの経歴（専門性、得意領域、期間など）、フリーランスという立場へのこだわり、フリーランスの良い点と、困ったり難しい点などである。経験年数数年から50年以上（少数の学生・大学院生、企業勤務（独立予備軍！）、独立起業をしながらフリーランスとして情報発信する編集者も）と広く、専門性も多

3 ブルーバック創刊後10年の著者として紹介した4名をこの分類にあてはめると、「中野不二男」タイプが、松原宏遠と荒正人で、荒はいまでいえば瀬名秀明に近い。「内橋克人」タイプが、相島敏夫（共著者で駒沢大学教授の丹羽小弥太は「中村桂子」タイプ）。技術史家としても知られる奥村正二は、本業が弁理士なので「餌取章雄」タイプに近いといえよう。

表 1.

名前	ジャーナリストとしての活動年数	肩書き	主な活動領域	代表作(フリーになる前の作品も含まれることがある)	この一言に注目
辻野貴史	3年	京都大学の一学生, 京都大学VBL特別奨励研究員(パンチャー支援プログラム), サイエンスライター, 個人事業者	書籍, インターネット	『こちら気になる科学探検隊 ナノテクノロジーを追う』日経BP(2003)	政府や公的機関, 企業など組織を相手にする場合は, 個人よりも所属があったほうが便利だと考えています。
内田麻理香	数年?	必要ないのでなっていない(カソウケン研究員)	インターネットホームページ, 出版準備中(2005年2月に「カソウケン(家庭科学総合研究所)へようこそ」が講談社から刊行に)	ホームページ「カソウケン(家庭科学総合研究所)」 http://www.kasoken.com/	(スキルに関して) 定期的なホームページでの連載とホームページ閲覧者からのリアルタイムのレスポンスが「訓練」になっている?
竹村真由子	3年	デザイナー	雑誌(WWFジャパン機関誌), ロゴ, ポスター, パンフレットなどのデザイン。『バイオニクス』科学風刺画	WWFジャパン機関誌	デザイナーとして感じるのは, 科学の分野でのデザインへの投資は, 比較的重視されていないと思う。特に研究などになると資金繰りが大変な場合が多く, デザイン費までとってられないというのが現状である。
竹内晋吾	3年?	日本火山の会代表, 東京工業大学地球惑星科学技術補佐員	火山学に関する一般向け解説, 講演, 教材制作	『火山噴火シミュレータ』	専門教育過程を受けている大学院生などを一般への科学普及に積極的に活用し, また普及活動に対して対価を払い大学院生を経済的に支援する仕組みができれば。
横山広美	4年	サイエンスライター(編集部によっては, 記事の内容によって「科学ジャーナリスト」に)。どちらもやっていきたいので, あまりこだわりはない。	科学雑誌での原稿執筆, トークショー出演	『子供の科学』誌などに定期的に執筆記事。 『ILLUME』や『Science』など, そのほか多くの科学雑誌に執筆	中学時代から自分で科学記事をノートにまとめていたことが役にたっているように思います。
清宮正人	5年	バイオテクノロジーリサーチャー	生物学を中心にウェブ, 書籍で活躍	メルマガ『SciencNews』, ホームページ『BioToday.Com』 『eBenkei』など	アメリカのPubMedというフリーの文献データベースのように万人が利用できるようなオープンソースをもっと作っていく, または作るように働きかけをすることが大事なのではないか。
岡本 真	6年	ACADEMIC RESOURCE GUIDE編集兼発行人	インターネットを中心とした電子メディアの学術利用	ACADEMIC RESOURCE GUIDE	COEや独立行政法人, 大学広報課等で研究内容や成果の伝達という役目がジャーナリストに行き渡ってきてもいいのではないか
岡田小枝子	6年	科学・医療ライター	医療分野		(フリーの科学ジャーナリストについて) 仕事のニーズを開拓しなければならない状況にあり, これで食べていこうとすると非常に大変だろう。
荒船良孝	7年	科学ライター・ジャーナリスト	雑誌, ムックの取材・執筆	講談社『Quark』, 別冊宝島, 学研『科学』『大人の科学』など	科学が一般の人から遠いと思われるように, 科学ジャーナリストも, 世間からの認知を受けていないと思います。
井上雅之	7年	人間総合科学大学 法人企画部教科書担当, あとは個人名で	企画・編集・執筆	ラジオ放送や博覧会展示の企画を出発点に, 医学部向け情報誌『ヒボクラテス』編集長, 科学雑誌『ネイチャーインターフェイス』副編集長を経て, 人間総合科学大学教科書の編集責任, 月刊『文芸別冊』執筆	学会(研究), 教育界とジャーナリズム界の隔たりのなかに, 特に科学ジャーナリストがいるため, 科学ジャーナリストの位置づけが不明確になっていた。科学ジャーナリズムはその批評性も含めて日本の場合には今後の課題が多い。
坂元志歩	8年	サイエンスライター/エディター, リサーチャー	企画 取材 執筆 編集	『ニュートン』編集・記者時代の各種記事, 『日経サイエンス』執筆・連載「性をめぐる7つのミステリー」, NHKスペシャルリサーチャーとして『地球大進化』など。NHK出版と学研から「地球大進化」で編集, 執筆した本が出版される。	テレビと本のように今は乖離しがちな媒体どうしの間をうまくつなぎ, 集めた情報を有効に回転させたい

表 1. Continued

名前	ジャーナリストとしての活動年数	肩書き	主な活動領域	代表作（フリーになる前の作品も含まれることがある）	この一言に注目
まつばらけい	10年	フリーライター, まれにジャーナリスト（名刺にはつけていない）。あるいは、「子宮・卵巣がんのサポートグループあいあい」主宰	食と健康を中心とした執筆活動	食と健康の専門誌編集記者のちフリーランスになり、共同通信、時事通信、『AERA』『週刊朝日』などで執筆。2000年からがんや医療領域で著作・執筆多数	病気や事故などで休職する場合、最低限の生活保証が必要ではないかと思う。
藤吉とーきち 隆雄	10年	photographer, カメラマン	雑誌・広告領域での撮影, カメラ・デジタルカメラ関連のテクニカル・ライティング, 写真関連の技術講義	技術系の執筆仕事は『SPA!』『アサヒカメラ』『講座』など	(フリーの科学ジャーナリストは)体系的発想でもっと一般メディアで活躍の場があるはず。
森山和道	11年	名刺には「ディレクター」。名乗るときは「サイエンスライター」	サイエンス, テクノロジー全般についての取材, 書評, 執筆, 企画。インターネット上でも大活躍	配信数2万を超えるメルマガ『NetScience Interview Mail』, 『日経サイエンス』連載「森山和道の読書日記」など	(フリーの)良い点は自分の好きにできること。いやな仕事を自己責任でやめることができること。自分より馬鹿だと思った相手と仕事しなくてもいいこと。悪い点は収入の不安定性, 経費そのほかの捻出, 保障がないこと, 病気や怪我。
粥川準二	12年	社会的な要素の強い仕事のとときのジャーナリスト（が多い）が、情報紹介的な仕事の時にはライターなど。	科学技術全般。とくに生物・医学系を中心とした執筆活動	主な著書は『人体バイオテクノロジー』（宝島社新書）『クローン人間』（光文社新書）『資源化する人体』（現代書館）など	科学そのものおよび科学を取りまく諸事情, 政策などを含めて「問題」を明らかにすることが本場の科学ジャーナリズムのあるべき姿では。
西村尚子	13年	名乗るときは「サイエンスライター」。名刺には「サイエンスライター・サイエンスエディター」	生命科学全般を中心とした取材, 執筆, 編集など	『日経サイエンス』特集プロテオミクス「日本の研究の現状」, 連載「性をめぐる7つのミステリー」, 『Nature』日本版広告付随記事執筆など	国立の研究所にプレスセンターを設置して、プロのサイエンスライター（エディター）を置いてほしい
大木勇人	13年	科学書・理科教科書の編集・校正	科学教育や科学分野での編集・執筆・校正	『新しい科学の教科書—現代人のための中学理科』（文一総合出版, 文科省検定外の教科書）, 『中学理科』（教育出版, 検定教科書）など	総合雑誌にもっと科学関連の記事が増えてもよいはずです。
門脇 仁	14年	環境・科学ジャーナリスト, 環境プランナー, 翻訳家	専門の生態学をベースに、海外環境レポート, サイエンスエッセー, 環境経営評価など, 地球環境全般に関する取材・執筆・翻訳。環境プランナーとしては、循環型社会構築に関わる生産技術, 情報コミュニケーション, マネジメント分野における著書・報告書の執筆。	「地球環境リテラシー」（『ネイチャーインタフェース』連載）, 「かわりを問う心, 読み解く力」（『MeSciMagazine』）, 著書『動き出す「逆モノづくり」』（日刊工業新聞社）, 『熟練技能をナレッジ化せよ「知」の共有が新たな価値を生み出す』（日刊工業新聞社）, 訳書『終りなき狂牛病—フランスからの警鐘』（緑風出版）など。	科学に対する一般の関心を高めるうえで、ジャーナリストや作家が活躍できる分野は多いと思います。ただし科学や哲学の読み物は、まだまだ権威主義の世界。体力のある出版社ほどリスクを恐れず、読者にとって身近な視点からサイエンスを語れる書き手の発掘に努めて欲しいと思います。
東田昭博	15年	メディカル翻訳（名刺）	医学・薬学・バイオその他科学技術文献の翻訳（訳書も手がけたことがあるが出版までこ着けたものはない）	翻訳会社・医学新聞『メディカル・トリビューン』からの受注による翻訳	(スキルに関して) 医薬品会社研究員時代の論文執筆経験が生きている。
森 健	15年	ライターもしくはジャーナリスト	厳密な意味での専門はないが、個人の関心として（取材企画の累積などから）しだいに生命科学分野の仕事量（原稿執筆）が増えていった	『人体改造の世紀』（講談社ブルーバックス）, 『ポスト・ゲノムビジネスのすべて』（明日香出版社）, 『天才とはなにか?』（数研出版）	欧米でのフリーランスでの受け止め方, とりわけジャーナリストというものの社会的評価は非常に高いものがありますが、日本ではフリーランスという言葉はむしろマイナス要素のほうが強い。
青木 薫	16年	翻訳家	科学書の翻訳	カール・セーガン著『人はなぜエセ科学に騙されるのか』, サイモン・シン著『フェルマーの最終定理』, ジェームス・D・ワトソン『DNA』など	(フリーであることについて) 社会的信用という点では、無職と同じかもしれません。

表 1. Continued

名前	ジャーナリストとしての活動年数	肩書き	主な活動領域	代表作（フリーになる前の作品も含まれることがある）	この一言に注目
鈴木クニエ	16年	フリーライター（ただし、編集の仕事をするときは編集者を使う）。紹介されるときは科学ジャーナリスト、サイエンスライターとなることが多い。	科学分野などの取材執筆、オンライン書店bk1書評およびコラムなど多数編集、マイクロソフト『エンカルタ』百科事典編集部医療および自然科学系担当	『日経トレンディ』取材執筆、『法学セミナー』1994年5月号 特集「売春防止法」取材執筆、『科学朝日』1995年1月号～1996年3月号連載「美味学事始」、『サイアス』随時執筆、ベネッセ『エンカレッジ』1998年～2000年 読み物ページ執筆など	収入が不安定なのはフリーの特性なので困るとは思っていない
戸矢 晃	16年	フリーランスライター、編集者（狭義のジャーナリストだとは思っていない）	企画、取材、ライター、編集、場合によっては写真撮影、DTPまでおこなう。書くことが主の場合はライター、本づくりが主の場合は編集者として肩書きを使い分ける	自然・生活・文化・景観などの環境を踏まえた建築と都市計画、まちづくり、教育。これら分野の雑誌や書籍多数	「ライター」「編集者」でよりアイデンティティを感じるのは「編集者」。この意味からも私は「ジャーナリスト」ではない。
池尾久美子	15年以上?	編集者（ジャーナリストだとは思っていない）	最近まで『蛋白質 核酸 酵素』（共立出版）の編集者を務める。	共立出版退社後、複数の出版社からの依頼を受けて書籍や科学雑誌増刊号を編集	
高橋真人	15年以上	メディアストラテジー社代表取締役/PRコンサルタント、ジャーナリスト	雑誌『選挙』など一般月刊誌への執筆、出版コーディネート、代筆	読売新聞記者（科学記事執筆の経験が長い）を経て独立。『宣伝費ゼロ時代の新しいIPR術』（KAWADE夢新書）	科学者全体（大学、研究機関等）がもっと科学ジャーナリズムの振興とサポートに力を入れるべき。現在、日本の科学界はそのあたりをまったくやっていないに等しいが、米国のやり方を見習うべきと思う。つまり国家や科学界の管理的立場にある人々が、これまで科学ジャーナリズムに対して無関心すぎたということ。現在の科学離れのお寒い現状は、そのしっぺ返しといえるのではないが。手始めに、科学振興財団や科学技術振興機構、あるいは日本学術会議のような公共性の高い団体が、科学ジャーナリズム振興や科学広報に予算を付け、活動を大幅に強化すべきと思う。さらに各大学に科学ジャーナリズムの専門講座を設けるような運動を行うべき。その際、企業社会の支援が欠かせないので、そのあたりまで含めたトータルな形でやっていかないと実現しないと思う。
日垣 隆	17年	編集者やプロデューサーにお任せしたいが、例えば月刊「文藝春秋」では作家、テレビやラジオではジャーナリスト。稀に評論家とか医療ジャーナリストなどと記されることも。最多は作家・ジャーナリスト。	雑誌、書籍、テレビ、ラジオなどで、科学技術分野に限らず幅広く活躍	主な著書に、『大学の冒険』（岩波書店）、『情報の技術』（朝日新聞社）、『エースを出せ!』（文藝春秋）、『されど、わが祖国』（信濃毎日新聞社）、『ご就職』（郷土出版社）、『少年リンチ殺人』（講談社）、『敢闘言』（太田出版）、『裁判官に気をつける!』（角川書店）、科学者との対談集『愛は科学で解けるのか』『ウソの科学 騙しの技術』『いのちを守る安全学』（新潮社）など。TBSテレビの情報番組「ウォッチ!」（火）のコメンテーター、TBSラジオの科学インタビュー番組「サイエンス・サイトーク」のキャスターなども。2002年10月から有料個人メールマガジン（年会費1万円）を発行し始め、2004年4月現在で1,600人の会員が購読中。	科学雑誌が廃刊になったり、書籍もあまり売れなくなったりという点で、良い状況とは考えられていないようですが、しかしそれは「科学ジャーナリズム」という独立現象が行き場を失っているだけのことで、森羅万象にわたり科学ジャーナリズムの役割も実際の仕事も増大していると思います。アクチュアルな諸問題と格闘するうえで、科学全般の知識や好奇心が不可欠な時代になったためです。例えば、イラクや北朝鮮を取材旅行するにしても、軍事や医療や宗教や歴史やゴミ処理や給水や録音などなどに詳しい知識や好奇心がなければ、極小分野に陣地をもつ専門家には対抗できませんし、それならジャーナリストは不要になるでしょう。

表 1. Continued

名前	ジャーナリストとしての活動年数	肩書き	主な活動領域	代表作（フリーになる前の作品も含まれることがある）	この一言に注目
薄羽美江	フリーになって18年	エムシーブランニング代表取締役、フリーアナウンサー、コーディネーター、コンサルタント、コミュニケーター、講演者、司会者など。	左記の通りさまざま。そのお仕事によって、ネーミングをいただく、サイエンスイベントの司会を通して科学と社会とのパブリックリレーション、ラジオ番組制作、インタビュー、フォーラム実施、出版企画など。	NHK総合『アイデア対決ロボットコンテスト'90』MCほか、テレビ朝日、テレビ東京、テレビ神奈川等でMCレポーター、VPキャスター、フォーラムMC。おもに宇宙科学分野などのイベント司会なども多数。	（フリーであることと、所属があつて仕事をすることを比較して）自らの研鑽が求められる、自律の精神が必要であるという点においては同じだと思います。情報の収集共有量においては、ひとりのフリーのスタンスよりも組織性の大きい方がより有利であると思いますがその質と駆動力や自由度においては、フリーの方が、自己裁量が大きいと思われしますので、能力やネットワーク力いかなでしょうか。
日方麻理子	15～20年?	フリー編集者、名刺には編集、取材、校正と表記	科学分野を中心とした出版活動	『ジャパンインパクト』『南極からのメッセージ』『南極大紀行』（NHK出版）ほか	（フリーランスの良い点と悪い点は？）良い点は、人間関係に煩わされない、雑用をおしつけられない（特に女性は細々とした雑用を当然のようにさせられるので）。困った点は、やはり出版不況のせいで仕事がコンスタントにこないこと。
青木 満	約20年	基本的には「フリーランス・ライター」。天文講演の際には、第一線で活躍する研究者の声や研究成果を咀嚼して解説する「サイエンス・インタープリター」。本当ならば「アストロ・インタープリター」と名乗ることも、今後、検討したい。	プラネタリウム解説員、パリ島での天文普及活動を経て、現在、「月刊天文 スタッフ・ライター」などとして活躍中。	単行本は、「プラネタリウムへようこそ」（地人書館）、「なりたい！ プラネタリアン」（Da i - X出版）、「南の島の星空情報」（パリ天文教育センター）、「ようこそ、南十字の星空へ」（パリ天文教育センター）。天文以外で、「アジアの神々」（共著、同文書院）、「パリ島で遊ぶ」（共著・監修、トラベルジャーナル）。	確かに「百聞は一見にしかず」ではありますが、自分が見たその「事実」が、必ずしも「真実」ではない場合もあり得ますので、その点常に注意が必要です。
東嶋和子	約20年	科学ジャーナリスト、サイエンス・ジャーナリストなど	読売新聞社を経て、91年よりフリーランスで科学分野を中心に取材執筆。特に生命科学、医療福祉分野を中心に「いのち」をキーワードに科学と社会とのかわりを追う。	『緩和医療の現場から—がんとともに生きる』、『死因事典人はどのように死んでいくのか』、『ロボット教室』、『科学・知ってるつもり77』ほか著書・共著多数	
武田 徹	約20年	ジャーナリスト、評論家。場合によってはノンフィクション作家など。基本的には仕事を相手にお任せする。	雑誌・書籍。東京大学先端科学技術研究センターで、ジャーナリスト養成もおこなう。	『核論』（勁草書房）、『戦争報道』（筑摩書房）、『若者はなぜ繋がりがたがるのか』（PHP研究所）、『流行人類学クロナクル』（日経BP社）、『隔離という病い』（講談社メチエ）、『調べる、伝える、魅せる！ 新世代ルポルタージュ指南』（中公新書ラクレ）など	科学雑誌にしか科学記事は書けないのか？ 既存メディアに合わせる必要はない。自分でメディアを作るくらいの気概がほしい。
松浦晋也	約20年	ノンフィクション・ライター	科学技術分野の書籍、雑誌、メルマガなどさまざまな原稿執筆。	『H-Iロケット上昇』（日経BP）、『われらの有人宇宙船』（装華房）、『国産ロケットはなぜ墜ちるのか』（日経BP）、『食玩』、『王立科学博物館』（タカラ）同封パンフレット執筆（コンビニなどに100万個以上を出荷）	「市場に自分を売り込む」ではなく、「自分で市場を作る」というつもりで仕事をしたいかなければならない。ポピュラーサイエンス分野で信頼できるメディアを作らなければと思っています。
渡辺政隆	大学院在籍中から二十数年	サイエンスライターに統一。かつては、科学エッセイストと科学ジャーナリストを仕事によって使い分けていた	進化学を中心とした原稿執筆と翻訳。文部科学省科学技術政策研究所研究官でもある。	『ガラガラヘビの体温計』（河出書房新社）、『DNAの謎に挑む』（朝日選書）、『翻訳『ワンダフル・ライフ』（S・J・グールド著、早川書房）	（フリーの科学ジャーナリストが、現在おかれている状況について）不安定すぎる。使い捨て的な感覚が。
白尾元理	20年以上	photographerとしているが、サイエンスライターと言う肩書きと併せて使うことも（写真＋解説、などの際に）。	火山や天体などの写真の提供と執筆。学会誌やパンフレット、書籍など、教科書など。	『子供の科学』『ニュートン』など幅広い	本業以外のこの仕事、出版社や地方公共団体から火山の写真のリエストがしばしばくるようになりました。

表 1. Continued

名前	ジャーナリストとしての活動年数	肩書き	主な活動領域	代表作（フリーになる前の作品も含まれることがある）	この一言に注目
佐藤年緒	29年	環境・科学ジャーナリスト	・フリージャーナリスト=分野を特定せずに広い立場で取材するとき ・日本科学技術ジャーナリスト会議事務局長=会議活動での肩書き ・日本環境ジャーナリストの会理事=環境分野での取材 ・元時事通信編集委員=もと出入りしていた役所で 環境・科学ジャーナリスト=科学関係取材の際（アイデンティティ） ・環境ジャーナリスト=環境問題を市民団体などに入って取材する場合	『世界週報』記事 水供給施設の運営組織づくりを支援=西アフリカ・セネガルの援助現場から 日本人宇宙飛行士9人の群像（連載）『環境』で求められる日本の役割—地球サミットから10年を検証 人口90億の世界にどう立ち向かうか—貧困、環境、食糧、資源	（フリーになったきっかけは）組織での仕事より、自分が関心を持つテーマを丁寧に追いかけることができると考えたから。
松尾義之	29年	白日社編集長、科学エディター、東京農工大学非常勤講師、ドキドキ科学探究処、科学ジャーナリスト	科学分野の書籍の編集（日経新聞社出版局を離れて小規模出版社の事業を引き継ぐ）、そのほか講演や雑誌原稿執筆。	科学技術を含めて、広く、日本のあるべき姿を再構築する上で必要な書籍の編集。	（フリーランスになったきっかけは？）マスメディア、大出版社の編集部門では、僕にとって大事な仕事ができないことがはっきりしたから。
深川昌弘	29年	近未来社（自然科学系の専門出版社）代表	地震・斜面崩壊等の自然災害科学、土木・地盤工学、文化財保存科学などの分野を中心に出版活動が続けてきましたが、他の有数の出版社がこれまで手掛けてきた“教科書・テキスト”と言われるものを企画視野から意識的に除外しています。重要なことは、研究者の研究動機、失敗を含む研究プロセス等を詳細に記述することにあると考え、そこに執筆の力点を置いていきます。ただ、学問としての体系性は自然と希薄になることは避けられませんが、このことによって、目に見えない自然のもつ力の大きさ、科学を考えることの面白さはより伝えられるのではないかと考えています。	(1) 渡辺邦夫著『地中の虹・地下の世界を訪ねて』 (2) 千木良雅弘著『風化と崩壊・第3世代の応用地質』 (3) 沢田正昭著『文化財保存科学ノート』 (4) 佐藤正著『地質構造解析20講』 (5) 高橋保著『土石流の機構と対策』	出版の世界に足を踏み入れてから今日まで、自分自身をジャーナリストと意識したことは一度としてありません。ジャーナリストとしての真髄は、まさに現状に対する弛まざる批判精神を持ちながら発言し続けていく者、と理解しております。その批判精神の基底には、科学に対する幅広い関心と、諸科学に纏わる知識や理解力・応用力が必要とされるでしょう。これらに対する問題意識の量・質・力ともに大幅に欠如していることを認識している者として、自分自身を一人のジャーナリストとして位置付けることへの畏怖心を常に持っております。そしてそれは、これまでの私の行為、すなわち自然科学分野の企画発掘から実際の編集・出版に至る全過程で、“避けることの出来ない大きな壁”として立ちちはだかっています。
大江秀房	30年程度	科学ジャーナリスト	科学分野の事・辞典類の執筆・翻訳、自然科学書の翻訳、リライト、雑誌連載など	『早すぎた発見、忘れられし論文』、ド・ジェンヌ著『科学は冒険』（いずれも講談社ブルーバックス）など、多数	かつてイギリスでやっていたように、「学術情報普及協会」を活性化して、ジャーナリストに仕事を提供して生活をサポートすると同時に、科学情報を一般の人びとの生活に浸透させる仕組みも、一考の余地ありと思います。
尾崎正直	55年	科学技術ジャーナリスト	執筆および講演（最近では先端技術、エネルギー、環境などが多い）	『21世紀への助走—科学技術の未来』（朝日新聞社）、『最新科学技術のことがわかる本』（日本実業出版社）など多数。テレビ出演として、青森テレビ『正直先生のエネルギー講座』は10年続いている	最近の傾向として、特に企業関係の研究者や研究所の取材はフリーでは難しくなっている気がする。

様な回答者から、興味深い答えが届いた。多岐に渡る内容を整理して、ここでは紹介することとしよう。

フリーランスの肩書きの使い分けは？

まず、肩書きについては、ライターあるいは×××ジャーナリストと

名乗る場合が多いが、実に多様である。ときどき仕事の内容（ライターとしての同行取材、ジャーナリストとして主張を展開など）によって、複数の肩書きを柔軟に使い分けることは珍しくない。

フリーランスになったきっかけも肩書き同様さまざまだが、経験年数 10 年前後でも、メディア企業で仕事を身につけてから、志を抱き独立するケースが目立つ。ライター、翻訳家の場合、編集者とのやりとりが勉強の機会になるという意見もある。日本では、ジャーナリスト教育を受ける機会は、オンザジョブ・トレーニング以外に少ないことの結果がそのままアンケートに示されている。

6. 仕事の獲得法は？

仕事の獲得については、「依頼中心」が 22 人と多く、「依頼と売り込みが半々」が 8 人（但し決まった媒体があることもある）、「売り込み中心」が 3 人だが、自分のやりたい仕事や収入を確保するために売り込みの必要性を感じているという指摘もあった。会議の活動の一つとして、仕事の斡旋や紹介を期待する声もあった。

フリーランスになることで、仕事があってもギャラが安いために収入が低かったり、定常的な仕事の確保が課題になっていること、病気になって仕事ができなくなるときの不安の指摘は多く、楽な商売ではないことが繰り返し強調される。いっぽう、経験年数約 20 年以下で実際にフリーランスとして生活している人で、嘱託契約を含むフリーランスへのこだわりを抱いている人（15 人）が、よい条件（ギャラや仕事の内容、兼業を認めるなど）の組織に所属したいと考える人（10 人）よりも多かった（さらに、会社員の仕事の傍ら情報発信をしているが、できればフリーランスとして独立したい人が 2 人）。

限られた調査であるが、比較的中途採用やフリーランスが多いメディア業界にみられる一般的傾向がみられていて、やりがい（とくに組織内）やギャラ、給料などの働き方の要素が改善されない限り、この傾向が続いていくと感じられた。

なお、アンケート手法はつぎのとおりである。会議名簿のフリーランス、科学書出版人メーリングリストメンバーなどのフリーランス 50 名余に電子メールでアンケートを送るとともに、5 名の方に 1 時間から 2 時間程度のインタビューをおこなった。アンケート回答は 35 通で、回収率は 6 割を越えた。インタビューを含め、協力いただいた 39 名のうち会議会員は 9 人。非会員 30 人のうち会議の活動

について「知らない」が3分の1の20人（名称のみ、存在のみ、あまりよく知らないの5名を含む）に達し、「まず、会議自身が何をやっているかを認知すべき」という意見もあった。

7. 日本科学技術ジャーナリスト会議に何ができるか

上の調査のためのやりとりの過程で、フリーランスで仕事をしている共同研究者の1人（林）が無料（初刷印税なし）で原稿を引き受けて、フリーランスに協力をお願いしたことに、私自身のフリーランス問題への認識の低さがあると痛感させる指摘を複数のフリーランスの友人から受けた。毎月の給料がある企業所属のジャーナリストに対して、フリーランスはたとえ短時間だとしても、有料の仕事に費やす時間と天秤に掛けたうえでアンケートに答えることになる。例会講師への謝礼や事務担当者へのアルバイト費用をのぞき、人件費の支払いがない無償ボランティアによるいままでの会議の運営を踏襲し、会員には、印税・原稿料なしで、原稿執筆や調査が依頼された。

一方的なお願いが会議への誤解を招き、科学ジャーナリズム振興という会議に求められる役割と逆行しかねない可能性さえあると感じられ、アンケートやインタビューのお願いはたいへん心苦しいものであった。もちろん、フリーランスでも企業所属でも、ともによりよい仕事ができる環境づくりにこの文章が役立つことを願っている。

その点からみて参考になる会議への指摘を分類してみると、つぎのようになる。身分が不安定であるフリーランスへのサポート、仕事を得る機会や取材のための利便など、科学ジャーナリストや科学コミュニケーターが切磋琢磨する場をつくる横断的な組織の運営のために、参考にできることは多いのではないだろうか。

- (1) 「科学ジャーナリズム」全体に対して — 「科学ジャーナリスト」全体の質の向上にむけての活動 / 科学ジャーナリストが社会的に認知されるための活動 / 「科学書を読む大衆」という市場を作る。
- (2) フリーランスへのサポート — 同業の方々との横のつながりが持てるようにする / フリーの科学ジャーナリストたちが利用できる情報ネットワークの構築 / ライターバンクのようなものを作り、需要と供給の橋渡しをする / 求人情報などを、分野別に掲載 / 取材ビザ、記者証の発行 / 福利厚生充実 / 調

査報道の企画を公募し、当選者には取材費を支給／フリーランスの意見や要望を出版界に反映させる活動。

- (3) その他 — 科学コミュニケーションの場の政策的な提案の組織的展開／広く、サイエンスライティング、テクニカルライティングも視野に入れた活動／まず、JASTJ 自身が何をやっているかを認知させる。

とくに具体的に述べれば、有料の電子ジャーナルや新聞データベース、今後充実するだろうテレビ番組アーカイブへのアクセス権、シンポジウムなどの取材時に提示できる会員証（本人確認のための写真、会議の趣旨や取材協力のお願いの日本語と英語の表記あり）の発行は、多くの会員に歓迎され、フリーランス会員の増加にもつながるにちがいない。

8. 科学ジャーナリズムへのネガティブ・キャンペーンを乗り越えて

ほとんどが会議などの組織に加入することもなく、仕事の受注先や専門領域を個々に築いているフリーランス科学ジャーナリストの実態に迫るべく、いくつかの作業を試みると同時に、フリーランスの活動をサポートできる横断的な組織のもつ可能性についても、インタビューやアンケート結果を活用して言及することができた。最後に、この調査をもとに、今後何をしたらよいのか、少し述べておきたい。

「日本には欧米のようなすぐれた科学ジャーナリズムがないし、科学ジャーナリストも少ない」「科学雑誌が売れないし、科学リテラシーも低い」という主観的な科学ジャーナリズムへの批判、さらには、政府の政策の根拠となるようなネガティブ・キャンペーンが続いている（例えば、先述の文献⁽²⁾）。確かに、1980年代初めに相次いで発行されたビジュアル系科学雑誌が、その刊行ブームから20年を経て、『ニュートン』が健在である以外、みな休廃刊に至り、そのあとを追うようにビジュアルで「わかりやすい」編集方針をとった『科学朝日』とその後継誌『SciAs』も、部数増の目標がはたせず、3万を越える読者がありながら、朝日新聞社の決定によって消滅した。

そのいっぽう、1980年代以降、日本国内では、分野を細かく区切った専門誌や業界紙誌が多数発行されてきたことを明らかにする興味深い調査結果もある⁽³⁾。

そのような媒体は、多くの編集者やライターによって発行されたものだ。少なからぬフリーランスが、刊行にかかわっているにちがいない。

ビジュアル系科学雑誌が読者に飽きられる一方で、読者を限定した専門誌や業界紙誌が刊行され続けたのは、1980年代以降の日本の科学（技術）ジャーナリズムの特徴であるようだ。科学ジャーナリズムが存在しないこともなく、また、科学ジャーナリストが少ないということもなく、むしろ特徴をもった科学ジャーナリズムがある実態をもって存在していると考えられる。ビジュアル系科学雑誌が読者に飽きられてしまったのは、科学リテラシーが低いことによるというよりも、むしろ、読者の求めるレベルに科学雑誌の編集方針が追いついていなかったのかもしれない⁽⁴⁾。

書籍、雑誌、インターネット、新聞、放送など、いくらネガティブ・キャンペーンをしようとも、利用する価値のあるさまざまな科学メディアは確かにあるのだ。これら活用しない手はないし、問題があるのであれば、さらに質を向上させる具体的な手だてを考えるべきだろう。表に示したフリーランスの発言のなかからも、そのヒントを得ることができる。

このようにみてくると、日本の科学ジャーナリズムや科学コミュニケーションを向上させるためにも、印象批評に留まりがちなネガティブ・キャンペーンから脱却した、より実証的で本質を捉えた批判的な研究によって、実態を深く捉え、課題をあぶり出し、その解決をめざすことが重要だし建設的であるということがわかってくる。そのための、研究実践を今後も継続していきたい⁽⁵⁾。

文 献

- (1) 秋田摩紀：日本思想史学、35号（2003）169–187
- (2) 文部科学省科学技術政策研究所調査資料 No. 97 『我が国の科学雑誌に関する調査』（2003）
- (3) 前波晴彦：我が国における自然科学・技術関連雑誌創刊数の年代別検討、『国際文化研究』第10号（2004年3月刊）東北大学国際文化学会
- (4) 林 衛：科学報道は『わかりやすく』から『魅力的に』 — 市民も科学者も目が離せなくなる記事を、新聞研究（日本新聞協会刊）5月号（2003）30–34
- (5) 林 衛・加藤和人・佐倉 統：なぜいま「科学コミュニケーション」なのか？、

生物の科学遺伝, 2005年1月号(2005)30-34 特集「科学コミュニケーション
— 生物学と社会の新しい関係づくり」特集にあたって、および同特集の各記事
参照